

## 活動の概念と記憶の問題

——— 随意的記憶と不随意的記憶のパラドックス ———

教育心理学教室 高取憲一郎  
Takatori Kenichiro

### (一)

これまで我が国の心理学界において、人間の記憶については数多くの研究が行われてきたし、現在も相変わらず相当数の研究が進行中である。それらの諸研究において共通に見受けられる記憶理論ともいべきもの、すなわち記憶をいかにとらえるか、あるいはいかなる視点より記憶を見るかという問題については、根底的な疑問をかねてより筆者はいただき続けてきた。その疑問を明らかにし、批判を加える前に、それらの記憶理論を一瞥しておこう。

たとえば、園原太郎他編の心理学辞典（ミネルヴァ書店、1971年）の「記憶」の項目には、「経験を記録し、ある時間保持し、再現すること。保持時間の長さにより短期記憶（STM）と長期記憶（LTM）とに分ける。再現には再生（想起）、再認、再構成などの形式がある。」（p.66）とされている。なるほど記憶とは上述のようなものにはちがいないが、そこに欠けているのは、単なる記憶の機能そのものだけを問題とするのではなくて、実在的主体としての人間の記憶を問題とするという態度である。人間の活動全体の中に記憶がどのように位置づけられるかという、いわば人間的記憶そのものを取りあげない限り、心理学としての記憶理論とはなりえない。その点で、従来の記憶理論を前進させた定式化として評価できるのは梅本堯夫〔1〕のものである\*。彼は記憶行動という現象を、内的なものとの外的なものに分け、それぞれを記録、保持、再現、感情反応の局面ごとに叙述しており、とくに従来の研究では内的記憶行動のみが問題にしなかったことを考えれば、指に糸をくくりつけるとか、メモをとる、カードをつくる、記念品をつくるなどの外的記憶行動の重要性を指摘した点は、重要な前進である。だが、この包括的・体系的に見える記憶行動の定式化も、まだ分類しただけであり、不十分なものと言われざるをえない。そこには実在的主体としての人間と記憶

※梅本堯夫の記憶の定式化

	記 録	保 持	再 現	感情反応	
記憶行動	内的記憶行動 (素記憶)	暗誦する リハーサルする 符号化する	寝る 安静にする	再生する 再認する 再構成する	楽しむ 悩む なつかしがる
	外的記憶行動 (道具的記憶)	指に糸をくくりつける メモを取る カードをつくる 写真をとる 録音する 記念品を作る 碑を建てる	保管する	見る 読む 聞く 検索する 探す 再建する	

の関係の認識が、すなわち、人間の活動の過程においていかにして記憶が発生するかという発生的認識が欠けている。換言すれば、主体と客体の弁証法的関係のなかで記憶を位置づけるという視点が欠けている。

以上の議論に関係して、ここで吟味しておきたいのは、ルビンシュテイン [2] の論文「心理学の哲学的基礎について。カール・マルクスの初期の手稿と心理学の諸問題」である。この論文の中で、1844年のマルクスの「経哲手稿」が心理学にとって決定的な意義をもつものとされ、次の三点が重要なポイントとして指摘されている。第一に、人間とその心理の形成における人間の実践的（および理論的）活動、労働の役割を認めること。第二に、人間の活動によって生成される対象的世界は、人間的感情、人間的心理、人間的意識のあらゆる発達を制約すること。第三に、人間の心理、人間の感覚は歴史の産物であること。さらに以上に加えて、1844年の手稿の中でマルクスは、ヘーゲルが実在的主体としての人間の位置に、思考の抽象作用、意識または自己意識を置きかえるという誤りを犯したことを見てとったとルビンシュテインは指摘している。

さて、ここで関連があるのは、とりわけ第一の人間心理の形成における実践的（理論的）活動、労働の役割の承認と、思考の抽象作用、意識または自己意識を実在的主体としての人間の位置に置きかえるというヘーゲル的誤りである。従来の記憶理論の決定的誤りは、実践的（理論的）活動の役割の無視と、その結果として、人間の占めるべき位置への記憶という心理過程の置きかえ、さらに言えば、主体と客体の弁証法（これこそが労働であり実践的活動である）の代りに、心理的過程と客体との対置、ここにこそあったのである。

では実践的活動、労働とは何か。活動＝労働の概念を明らかにするためには、まずマルクス [3] の「資本論」の労働過程の検討から始めねばならない。

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行動によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材にたいして彼自身一つの自然力として相対する。彼は自然素材を、彼自身の生活のために使用される形態で獲得するために、彼の肉体にそなわる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。」(p.234)

とりあえずここでは、以上のマルクスの労働過程論のなかで、人間は労働によって外界に働きかけ変化させると同時に自分自身の自然を変化させるという部分に着目したい。人間の本質が受身的受容にではなくて、能動的働きかけにあるとすれば、日常生活においてもたえず人間と外界との間のこの作用・反作用は生じているはずである。そして、人間の記憶もまた、このような日常生活で生ずるものである以上、この作用・反作用、すなわち活動＝労働の過程のなかで生ずると考えられる。スミルノフとズインチェンコ [4] が言うように、「対象への働きかけが、対象の心像を形成し、対象の不随意的記憶を保証するための最も一般的かつ必要不可欠な条件である。不随意的記憶は直接的なインプリント、あるいは感覚器官への対象の一方向的な働きかけの産物ではない。」(p.45) ここでスミルノフたちの言う不随意的記憶を、これまで我々が述べてきた記憶と読み替えてみれば(実はこの読み替えこそが正しいのであるが、その理由は後ほど判明するはずである)、彼らもまた記憶をマルクスの労働の概念との関連で考察していることがうかがわれよう。さらに彼らの指摘で重要なのは、「対象への働きかけが、対象の心像を形成」するという部分である。これはおそらく、マルクスの上記引用部分の直後の「労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像の

なかには存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。労働者は、自然的なものの形態変化をひき起すだけではない。彼は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現するのである。」(p.234)という箇所を意識しての見解と思われるけれども、人間と外界との相互作用(労働)の過程で心像が産出され、さらにその心像が不随意的記憶の成立する前提となるという指摘は画期的な重要性をもっている。

さて、後述の不随意的記憶と随意的記憶の問題にもかかわるので、労働過程のうちの作用の側面について、もう少し掘り下げておこう。一般的に考えれば、人間が対象に働きかけるとは、たとえば大地を耕すとか、木材を加工して家具をつくるとかのように、自然的対象に対する加工、あるいは変形、すなわち形態変化のことである。しかし、そのような対象に対する働きかけ(実践的活動)は、必ず精神的働きかけを伴い、あるいは前提するものであるが、そのような精神的側面における働きかけとは一体どのようなものであろうか。

この問いに対する答えを与えるまえに、その準備作業として、マルクスの「資本論」の労働過程を学びそれを自己の心理学体系のなかにとり入れているとされるピアジェ [5] の著作から、関連部分を取り出してみよう。彼は「発生的認識論」のなかで、「わたくしは人間の知識というものを本質的には活動的なものと考えています。……(中略)。知るということは、いかにしてある種の状態が、そこにもたらされたかを理解するために、現実を変形することです。この視点をとることによって、わたくしは、知識とは写しであるという、すなわち現実の一種の受動的な写し(copy)であるという学説とは対立することになります。」(p.19-20)と述べている。以上の引用部分からわかるように、ピアジェは知識とは現実の写しではなくて活動的なものであること、また、知るということは現実を変形するということであることを主張している。すなわち、知るということは、人間と外界との作用・反作用(つまり活動)の過程で生まれ、実践的活動が外界に対して働きかけ加工し変形させるように、知的活動も「現実を変形すること」であると考えている。ここでピアジェは、いわゆる実践的唯物論の立場へ大きく共鳴していると思われる。

さて、では知的活動(精神的働きかけ)を現実の変形とみなすならば、その変形は瀬戸明 [6] が主張するように、言語を手段として、外的世界に対して〈意味〉＝〈概念〉のきざみこみとして行なわれ、そこから法則、理論などが再生産されることであると、とりあえずみなしておこう。瀬戸明の主張では、「意味のきざみこみ」としての知的活動という視点が、記憶理論との関連で重要になる。

記憶の問題を考察するに際して、必要と思われる活動の概念の検討は以上にとどめておいて、次にソビエト心理学における記憶理論のうち、活動の概念ととりわけ関連深いと思われる随意的記憶と不随意的記憶の問題に立ち入ろう。

## (二)

随意的記憶とは意図的に記憶すること、すなわち初めから何かの対象を記憶しようと思って記憶することである。これに対して不随意的記憶とは、再びスミルノフとズィンチェンコを引用すれば、対象への働きかけの結果として生ずる記憶であり、そこには記憶しようという意図は存在しない。しかし、以上の定義のみしか下さないならば、いわゆる偶発学習あるいは偶発記憶との区別が明瞭ではないので、もう少し掘り下げる必要がある。ちなみに、相当過去の文献展望ではあるが、森川弥寿雄 [7] によれば、偶発学習とは「一定の材料を学習させようとする教示を与えないことによつ

て作り出された学習の動機のきわめて弱い条件の下で明白に生じた学習」、又は「学習に対する実験の操作的指示がなく、又学習に対する意図の内省的報告なしに起る学習」(p.14)と操作的に定義されると見なされている。そこで、スミルノフとズィンチェンコに従えば、不随意的記憶には二種類あり、第一のそれは目標志向的活動の産物、すなわち人間の活動がまさに向けられているところの対象、さらに言えば人間の活動が向けられている対象の中の一定の側面と人間との相互作用の結果として生まれる記憶である。これこそが、ここで不随意的記憶と呼んでいるものである。第二のそれは、第一の場合の目標志向的活動の対象の側面(目標刺激)を図刺激と考えるならば、当然、活動の目標とはならない対象の他の側面(地刺激)が存在するが\*、この地刺激によって生起させられる偶然的定位の産物としての記憶である。これがいわゆる偶発学習であり、偶発記憶であると彼らは考えている。

しかし、いわゆる偶発学習の研究においても、被験者の学習的構えを除くために、何らかのもっともらしい方向づけ作業というものが工夫されているのであり、ここではスミルノフたちの言うところの二種類の区分が意識的になされないまま、偶発学習という概念でまとめてとりあげられていたのである。だが、この無区分は、いわゆる偶発学習の研究においては人間と対象との相互作用を媒介するものとしての活動の概念などは無縁であったわけであるから、無区分のまま研究されてきたのもいわば当然であった。だが、理論的にははるかに優越した記憶理論に基づいて研究をすすめているソビエトの心理学者たちにも、実験条件の十分なる統制という点において若干の不備が認められる。たとえば、ごく最近のスミルノフとシュリチコバ[8]の実験において、15対の形容詞対(合計30語)を呈示し、随意的記憶条件では記憶するという指示により記憶させ、不随意的記憶条件では15対の形容詞を各対ごとに同意語の関係にあるか、あるいは反意語か中立語かの三件法で判断させ、15対の判断終了後に形容詞の再生を要求した。その結果は、5年生・8年生・大学生の三年齢段階において不随意的記憶の再生が随意的記憶の再生に優った。彼らは、同意語・反意語・中立語のような意味上の判断を下さねばならぬような能動的思考活動の産物としての不随意的記憶は随意的記憶に優ると結論した。しかしこの実験の問題点は、Saltzman[9]の時代的には相当過去の指摘を待つまでもなく、上の二群は実は異なることをしているのではないかということだ。一方は記憶作業、一方は判断分類作業をしているのであるから再生数を比較するにも比較できない。そこで、同一の内容の作業を行なわせながら、かつ記憶意図の有無という条件を設定して記憶の再生を比較する必要がある。以上のことをふまえて次の実験を行なった。

#### 実験の方法

実験計画は2×3の要因計画が用いられ、第一の要因はカードの種類(絵カードと文字カード)、第二の要因は記憶の種類(二種類の随意的記憶と一種類の不随意的記憶)である。

被験者は60名の鳥取大学教育学部の男女学生であり、1条件に10名ずつ割り当てられた。

記憶材料の内容は生物の名前15項目、日用品の名前15項目で、各々の15項目はさらに5項目ずつの下位グループにまとめられるように構成される。従って下位グループは3グループずつの計6グループできる。具体的に記すと、生物(〈ほ乳類〉:ラクダ、ウサギ、イヌ、ウマ、ゾウ、〈昆虫〉:テントウムシ、カマキリ、トンボ、カブトムシ、セミ、〈鳥類〉:タカ、ツバメ、ハクチョウ、

※たとえば彼らの実験のなかから具体例をあげれば、1枚のカードの中央には絵が、右肩部分には数字が書いてあるような15枚のカードを使用して、被験者に絵の分類をさせるときには絵が図刺激、数字が地刺激となり、逆に15枚のカードを数字の上昇系列順に並べさせるときには数字が図刺激、絵が地刺激になる。

ニワトリ、フクロウ)、日用品(〈食器〉:スプーン、チャワン、フォーク、サラ、ワリバシ、〈電気製品〉レイゾウコ、テレビ、センプウキ、デンキスタンド、アイロン、〈文房具〉エンピツ、ノート、ジョウギ、エンピツケズリ、フデバコ)である。以上の項目を縦13.6cm×横9.8cmの白ボール紙を中央横線(黒色)で上下の二つの部分に仕切ったカードに記す。1枚のカードには上(または下)に生物が記入されれば下(または上)には日用品が記入されるというように、必ず生物と日用品が一つずつ対にして記入される。どちらが上下にくるかはランダムに決められる。絵カードの場合はすべての項目を絵(黒色の線画)で表示し、文字カードの場合はすべての項目をカタカナ(黒字)で表示する。カードの枚数は絵カード15枚、文字カード15枚である。

手続きは、まず実験者と被験者は実験室のテーブルに坐り、見本用カード(上にネコ、下にトケイが記されている)を見せながら実験に使うカードの説明がされる。不随意的記憶群(以下Involuntary Memoryの略でIVMと記す)では、15枚のカードに記してある生物(また日用品)を三グループに分類し、各グループごとにテーブルの上に置いてある三つの箱の中に順次カードを入れていくようにと教示し、随意的記憶群(I)(以下Voluntary Memoryの略でVM(I)と記す)では、15枚のカードに記してある生物(または日用品)だけを記憶しなさいと教示してカードは順次テーブル上の一つの箱の中に入れさせる。随意的記憶群(II)(VM(II))では、IVM群と同じことをさせるのだが、三グループに分類しながら同時に記憶するようにと教示する。15枚のカードは実験開始前に全部を被験者にもたせ、1枚のカードにつき3秒間だけ見させて次の2秒間でカードをめくり箱の中に入れさせる。これは実験者がストップウォッチを見ながら合図をすることにより行なった。したがって1枚目のカードを見始めてから15枚目のカードを箱に入れ終るまでに75秒要する。15枚すべてのカードを箱の中に入れ終った後に、分類あるいは記憶した項目の再生を60秒の間に行なわせ、その後で、分類あるいは記憶しなかった項目(たとえば日用品を分類あるいは記憶した被験者の場合は生物がこれに相当する)の再生を60秒の間に行なわせる。再生は被験者が筆記で行なった。

なお、各条件10名の被験者のうち5名に生物を、残りの5名に日用品を分類あるいは記憶させ、結果の分析は両方を合わせてこみにして行なった。

### 実験の結果

#### 1. 随意的記憶と不随意的記憶の再生数

分類あるいは記憶した項目の平均再生数と標準偏差は表1に示してあり、2×3の分散分析の結果はあらゆる主効果および交互作用が見出されなかった。

表1. 条件別の平均再生数と標準偏差

	IVM	VM(I)	VM(II)
文字	9.4(1.20)	10.3(2.15)	9.8(1.40)
絵	10.2(1.60)	10.3(1.49)	10.6(1.50)

( )内は標準偏差

#### 2. 偶発記憶の再生数

偶発記憶、すなわち分類あるいは記憶しなかったほうの項目の平均再生数と標準偏差は表2に示してあり、2×3の分散分析の結果はあらゆる主効果と交互作用は見出せなかつた。

表2. 条件別の偶発記憶の平均再生数と標準偏差

	I VM	VM(I)	VM(II)
文字	1.8(1.25)	1.9(0.54)	1.7(0.90)
絵	2.2(1.08)	1.3(1.19)	2.5(1.43)

( ) 内は標準偏差

## 3. 体制化の指標

随意的記憶および不随意的記憶の再生の際に、15項目が5項目ずつの3グループから成っているために、同一のグループに属する項目は連続的に再生されることがある。この群化、あるいは体制化を数量化するために、たとえば被験者がセミ→ウマ→ゾウ→イヌ→ツバメの順で再生したとすると、中央の3項目はほ乳類という同一のグループに属するので $3 - 1 = 2$ を体制化の指標とする。すなわち同一グループの項目を $n$ 個連続再生した場合、 $n - 1$ を体制化の指標とする。平均と標準偏差が表3に示してあり、 $2 \times 3$ の分散分析の結果は記憶の種類の変因のみに主効果が見られた( $F = 3.72$ ,  $df = 2 / 54$ ,  $p < 0.05$ )。さらに三群の間の平均の差をテューキーの法により $t$ 検定すると(この場合は交互作用が有意でないで絵と文字を一緒にして行なった)、VM(II)とIVMの間に5%水準で有意差が見出された。

表3. 条件別の体制化の指標の平均と標準偏差

	I VM	VM(I)	VM(II)
文字	3.3(1.79)	4.6(1.56)	5.0(2.14)
絵	3.6(2.11)	4.1(1.58)	5.6(2.76)

( ) 内は標準偏差

## 4. 内観報告の分析

実験終了後、三つの下位グループの存在に気がついたかいなかを質問した。その結果は表4である。

表4. 三カテゴリーに気づいた被験者の割合

	文字			絵		
	I VM	VM(I)	VM(II)	I VM	VM(I)	VM(II)
気づいた被験者数	10	8	10	10	7	10
気づかなかった被験者数	0	2	0	0	3	0

## 考察

我々の当初の目的である活動と記憶の問題は、以上の結果から明らかなように、IVMとVM(I)、VM(II)の間に差がないという事実により立証された。すなわち、記憶意図がなくとも、対象への

働きかけの過程で、とりわけ本実験の場合は語の分類という対象への意味＝概念のきざみこみという働きかけの過程で、記憶が派生し固定された。もしもIVMとVM(I)のみの比較であれば、両者は異なる内容の作業を行なっているのであり、再生数を比較しても意味はないという批判も当てはまるが、IVMとVM(II)は作業内容は共通であり記憶意図の有無のみが異なる。しかも再生数には差がなかった。これはSaltzman [9]の結果とも一致している。またVM(I)とVM(II)の間に差がないという結果は、Neimark & Saltzman [10]の結果と一致している。

ところで、体制化の指標を検討すれば、IVMとVM(II)の間に有意差が見られただけで他には見られなかった。VM(II)がIVMよりも体制化が多いということは、同じ分類作業を行なっても、記憶意図のある場合のほうがより多く体制化の働きを記憶に利用するということであろう。分類作業を課されたIVMとVM(II)にも現われたということは、VM(I)でも実は記憶する際に項目の分類を行っていたのではないのか、すなわち意味＝概念の対象へのきざみこみを行っていたのではないのかという推測を成り立たせる。それは、実験中に三カテゴリーに気がついた被験者の割合が、IVM群とVM(II)群で100%は当然としても、VM(I)群でも75% (= 15/20) 存在したということからも明らかである。しかし、三群ともほぼ同じような体制化の指標を示したという事実は、記憶にとって体制化が非常に重要な役割を果していることの現われでもあるが、本実験のように体制化を助長するような分類という作業を不随意的記憶の条件として選んだことは適切ではなかったとも言えそうである。この点は今後の検討課題である。

ともあれ、本実験によれば、記憶意図がなくとも記憶は成立し、しかも再生数においても意図的記憶と差違はないという結果が得られた。この随意的記憶と不随意的記憶のパラドックスこそ、ルリヤ [11] が未完の遺稿で指摘したように、短期記憶と長期記憶のパラドックスと並んで、記憶におけるパラドックスの一つである。

さらに、再生数および体制化の指標のすべてにおいて、絵カードと文字カードの間に差違が見出せなかったが、これはPaivio説と異なる。その原因は、本実験の呈示時間が1項目につき3秒でありやや長いことにあるかもわからないが、よくわからない。

### (三)

我々は(-)および(=)において、活動の一つの側面のみをとりあげて論じてきた。それは、人間と対象との関係、すなわち人間が対象に対して働きかけ同時に自分自身をも変化させるという、いわば主体と客体の弁証法的関係であった。ところが、活動の概念にはもう一つの重要な側面が含まれている。それは、人間と人間との関係である。マルクス [12] は「賃労働と資本」の中で、次のように述べている。

「生産のさい、人間は、自然にはたらきかけるばかりでなく、またたがいはたらきかけあう。彼らは、一定の仕方ですべて共同して活動し、その活動をたがいに交換するということによってのみ、生産するのである。生産するために、彼らはたがいに一定の連絡や関係をむすぶが、これらの社会的連絡や関係の内部でのみ、自然にたいする彼らののはたらきかけがおこなわれ、生産がおこなわれるのである。」(p. 44)

以上の引用部分から明らかのように、人間同士の働きかけを前提し、それに媒介されることによって自然に対して働きかけるという二重構造を、実は活動の概念はもっている。それは、芝田進午 [13] の主張する労働の技術的過程と組織的過程の統一という概念と同義である。

さて、この活動の二側面については、ソビエト心理学の代表者であるレオンチェフ [14] はさすがに

鋭く指摘している。

「個人の人間的对象の世界にたいする諸関係は人びとにたいする彼の諸関係によって媒介されるということ、つまり対象的世界にたいする諸関係はコミュニケーションの過程に含まれるということである。この条件はつねに存在する。対象的世界に一对一で相対している個人や、子どもについて考える、などということはまったく人為的な抽象である。」(p. 54)

「人間は、彼をとりまく対象的世界に対し、決してひとりて相対するわけではない。人間と世界との結びつきは、彼と他の人々との関係によって媒介される。そしてそのことが他の人々との言語によるコミュニケーションを必然的なものにするのである。」[15] (p. 105)

前述のルビンシュテインの引用部分でも明らかであったが、ソビエト心理学の最も重要な貢献は心理学の中に活動の概念を取り入れ、それによって社会的＝歴史的な現実の人間を研究する基礎を開いたことであるが、従来のソビエト心理学においては、活動の一方の側面、つまり主体と客体の弁証法のみが注目されて、それと心理過程の関係の研究は多数行なわれてきた。しかし活動のもう一つの側面、すなわち人間と人間の関係＝コミュニケーションと心理過程の関係の研究は、ほとんど行なわれてこなかったようである。それはロモフ [16] が、「[従来] 活動という考え方は(具体的な心理学的研究で解明され、その考え方にかかわる装置が発展されてきたが、そういう形では、あらゆる場合に) 人間の社会的存在の一面、すなわち《主体－客体》の関係、しかとらえていない。」(p. 24)と指摘するとおりである。最近、ソビエトでは、ロモフなどが中心になって活動のコミュニケーションの側面と心理過程(とくに知覚、表象、記憶)とに関わる具体的研究が着手されているようである。今後の大きな前進が期待される重要な研究分野であろう。

さて、以上のように二過程の統一としてとらえられる活動は、あらゆる心理現象の基礎であり、あらゆる心理現象を説明する土台的基礎概念である。この場合、従来から主張されているところの、あらゆる心理現象は生理的過程に基礎を置くという命題に代えて、あらゆる心理現象は活動に基礎を置く、と主張しても見当はずれではないであろう。たしかに、あらゆる心理現象は生理的過程に基礎を置いてはいるが、その考えを突き進めていけば、心理学は生理学へと還元され、やがては心理学そのものは消滅せざるをえないし、社会的＝歴史的人間の心理過程と心理的構造を解明する学問としての心理学は成立しえないからである。

マルクスとエンゲルス [17] が、「諸観念、諸表象の生産、意識の生産はさしあたりはじかに人間たちの物質的活動と物質的交通——現実的生活のことば——のうちへ編みこまれている。」(p. 51)と述べるのも以上の事情を見通してのことであるし、さらにポリツェル [18] が、「心理学者らは、心理学の補助科学を問題にする場合、とりわけ医学に着目している。しかし心理学の基本的な方向性およびその組成からみれば、まさに経済学の意義こそ真に根本的なものである。」と述べるとき、事態は一層明瞭になる。

活動の概念に基づかない心理学は、人間の本質を理解するには不十分であるし、やがてはそのような心理学は新しい科学的心理学によってとって代わられるであろう。マルクス [19] も、科学的心理学のあるべき姿と労働の関係について、次のように述べている。

「産業の歴史と、その既成の客観的なあり方は人間の本質諸力の書が開披されたものであり、感性的なかたちで眼前に存在する人間心理学であることがわかる。……………心理学でありながら、それにとってこの書、つまり感性的にいともあざやかに現前していてもっとも近づきやすい歴史の部分こそがまさに閉じられているようなものは、現実的な、内容豊かな、そしてリアルな学問になることはできない。人間の労働のこの大きな部分をお高くとまって度外視し、そして己れ自身の



うちに己れの不十分さを感じないような学問のことを、……………、そもそも何と考えたらいいか？」

芝田進午〔20〕も指摘するように、ソビエト心理学においても、以上のマルクスの「経哲手稿」中の一断片については知られてはいたがその真意が十分につかまれていなかったことは確かである。しかし、マルクスのこの箇所を、生産的労働という労働現場の実践と結びつけた労働心理学こそが心理学の中心的支柱であるとする芝田氏の見解には同意しがたい。むしろ、筆者がいままで述べてきたように、心理現象の生成と発達的基础としての労働＝活動の重要性をマルクスは指摘しているというとらえ方こそが、ソビエト心理学の最近の発展と照らし合せてみても妥当ではなからうか。いずれにしても、活動の概念を土台にすえた心理学研究というものほとんど存在しないといっても過言でない後進的なわが国の心理学界を顧みると、1960年代の初頭にすでにこの点を鋭く提起した芝田氏の水準に敬服するとともに、それが心理学者によってではなくて哲学者によってなされたというところに、日本の心理学界の二重の意味での後進性を、あらためて見ざるをえない。科学的心理学の建設のためには活動の概念の研究が是非とも必要である。

## 文 献

- [1] 梅本堯夫(編) 1969 講座心理学 7 記憶 東京大学出版会
- [2] ルビンシュテイン, S.L. 1959 内藤・木村(訳) 心理学—原理と歴史— (下) 青木書店 8—38頁
- [3] マルクス, K. 資本論 第1巻第1分冊, 大月書店版
- [4] Smirnov, A.A. & Zinchenko, P.I. 1969 Problems in the psychology of memory. In M.Cole & I. Maltzman (Eds.) A handbook of contemporary soviet psychology. Basic Books, 452—502.
- [5] ピアジェ, J. 1972 芳賀(訳) 発生的認識論, 評論社
- [6] 瀬戸明 1978 現代認識論と弁証法, 汐文社
- [7] 森川弥寿雄 1958 偶発学習:文献展望, 心理学評論, 2, 14—35.
- [8] スミルノフ, A.A. & シュリチコバ, A.N. 1976 再認と再生を指標とする不随意的記憶と随意的記憶の関係について。心理学の諸問題, No.5. 84—94. (露文)
- [9] Saltzman, I.J. 1953 The orienting task in incidental learning. Amer. J. Psychol., 64, 593—598.
- [10] Neimark, E., & Saltzman, I.J. 1953 Intentional and incidental learning with different rates of stimulus-presentation. Amer. J. Psychol., 64, 618—621.
- [11] ルリヤ, A.R. 1978 記憶のパラドックス, モスクワ大学通報〈心理学〉No.1, 3—9. (露文)
- [12] マルクス, K. 賃労働と資本 国民文庫版
- [13] 芝田進午 1961 人間性と人格の理論, 青木書店
- [14] レオンチェフ, A.N. 1965 人間の心理における生物学的なもの和社会的なもの レオンチェフ, A.N. 松野・木村(訳) 認識の心理学, 世界書院所収
- [15] レオンチェフ, A.N. 1957 心理学の問題としての学習, 同上書所収
- [16] ロモフ, B.F. 1975 大津(訳) 一般心理学の問題としてのコミュニケーション, ソビエト心理学研究 No. 24, 23—37.
- [17] マルクス, K. & エンゲルス, F. ドイツ・イデオロギー, 国民文庫版
- [18] ポリツェル 1947 現代心理学の危機, エディション・ソシアル社, p.121. (ただし, この引用はリュシアン・セーブ, 大津(訳) マルクス主義と人格の理論, 法政大学出版局, 1978からの孫引である。p.218)
- [19] マルクス, K. 1844年の経済学・哲学手稿, マルクス＝エンゲルス全集第40巻. pp.463—464
- [20] 芝田進午 同上書 p.145

(昭和53年9月14日受理)

